

展示中



今号でご紹介した敷物の一枚は、常設展示室「装う」で展示しています。



ワイメック  
略称は YMEAC です

## 横浜ユーラシア文化館 Yokohama Museum of EurAsian Cultures

〒231-0021 横浜市中区日本大通12  
Tel. 045-663-2424 Fax. 045-663-2453

12 Nihon Odori, Naka-ku, Yokohama, Japan 231-0021  
Tel. 045-663-2424 Fax. 045-663-2453

開館時間 9:30 a.m.~5:00 p.m. (券売は4:30 p.m.まで)

Hours 9:30 a.m.-5:00 p.m.  
(Admission until 4:30 p.m.)

休 館 日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は次の平日)  
年末年始 (12月28日~1月3日)

Closed Mondays (except Holidays) and year-end/New Year's  
recess (28 December 2022 to 3 January 2023).

観 覧 料 一般200円

Admission ¥200 for adults  
¥100 for primary and Junior high school students,  
and city residents 65 years old and above

小・中学生、横浜市内在住65歳以上の方100円  
特別展・企画展の観覧料は別途定めます。  
毎週土曜日は、小・中学生、高校生は無料です。  
「身体障害者手帳」、「愛の手帳(療育手帳)」、「精神障害者保健福祉  
手帳」をお持ちの方と介護者は無料です。入館の際に手帳をご提示  
ください。

観覧券がオンラインで購入できます。購入・詳細は当館ホームページをご覧ください。



みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口すぐ  
JR「関内駅」南口・市営地下鉄「関内駅」  
1番出口から徒歩約10分

Zero min. walk from Nihon Odori Sta.  
on the Minato Mirai Line.  
10 min. walk from Kannai Sta.  
on the JR Line or Municipal Subway.

<http://www.eurasia.city.yokohama.jp/>

# News from EurAsia

横浜ユーラシア文化館ニュース



アートウォッチング  
Art Watching 2

動植物文敷物  
Wool Floor Covering with Overall Chain Stitch

ギャラリートーク  
Gallery Talk 6

牙製婦人像の「再発見」  
Rediscovery of Ivory Female Figurine

横浜・この街に生きる — 多文化共生都市の主役  
Diversity of Yokohama 8

第1回 周慶錦 老舗広東料理店を継いで  
No.1 SHU Keikin

蔵品紹介 — 新収蔵資料 —  
The YMEAC Collection: Recent Additions 10

催し物案内  
Exhibitions and Events 11

## Wool Floor Covering with Overall Chain Stitch

## 動植物文敷物

竹田多麻子 TAKEDA Tamako

鮮やかな色遣いと独創的なデザインが私たちの目に強烈に飛び込んできます。今回紹介するこの2点は、イラク南部の湿地帯に暮らしたマールシアラブと呼ばれる人々が作り出した敷物です。

砂漠のイメージが強いイラクですが、イラクの南部ではかつて広大な湿原が広がっていました。チグリス川とユーフラテス川が合流する地点であるクルナを中心にして約 20,000 km<sup>2</sup>に及ぶ場所が湿地帯にあたり、人の背丈を数メートル以上超える程の長い葦やスゲなどが群生し、水牛や水鳥などが生息する自然豊かな場所でした。この辺りは古代メソポタミア文明発祥の地として有名で、世界最古の都市遺跡が残る歴史ある場所でもあります。人々の生活は葦を使ったアーチ状の家に住み、水牛を飼い、葦製のカヌーを漕いでイノシシや水鳥、魚を捕るといって古代から続く独特なものでした。

この敷物は刺繍で一面を埋め尽くされた織物を2枚接ぎ合わせて1枚としています。土台となる毛織物は綾織で織られ、臙脂色をしています。その上に様々な模様がカラフルな羊毛の糸で刺繍されているので、上下の房の部分を除けば元々の色はほとんど見えません。

1枚の織物の模様は大きく3つのパートに分かれています。左右両側には3本のボーダーがあり、羽のような形、円、扇形、波形などの図形が組み合わされた幾何学文です。中央部分は、四角形で分割されていて、その中に菱形やV字の形が組み込まれています。四角形の四隅には、その隙間を埋めるかのように様式化されたラクダや鳥などの動物、花の様子が配されています。

これらの模様は、湿地帯で暮らした人々が目にした動物や植物などを表したのでしょう。

チェーンステッチを使った刺繍は、模様の輪郭に沿って刺して枠を作ってから、その中をびしりと隙間なく刺しています。刺繍の量は敷物全面を覆うぐらいですので、持ち上げるとかなりの重量があります。1本の鉤針でこれだけの刺繍を施すには多くの時間と労力がかかったことでしょう。このような刺繍を施した織物は、敷物としてだけでなく壁掛けや毛布、嫁入り道具としても使われたようです。



様々な形が組み合わされている



イラク 20世紀  
縦 280 cm × 横 178 cm  
当館蔵 (江上波夫コレクション)  
2枚を中央で接ぎ合わせて1枚になっている。

Iraq 20th century CE  
L. 280 cm × W. 178 cm  
Owned by the YMEAC, Egami Namio Collection



一筆書きのようにチェーンステッチで表された動物

この湿地帯は、1970年代以降ダム建設や度重なる戦争の被害、気候変動によって水が干上がってしまい、今から20年程前には全湿地の約9割が消失したとされています。これによって、さまざまな自然の生態系が破壊され、そこでの生活が難しくなり、人々は移住を余儀なくされました。2003年のイラク戦争終了後、湿地の回復が徐々になされており、2016年には4つの湿地帯とその周辺の都市遺跡が世界遺産に登録されました。しかし、以前のような暮らしはまだ戻っていません。これらの敷物は、マーシュアラブの伝統文化を示す貴重な資料の一つです。(YMEAC 主任学芸員)

文化学園大学名誉教授の道明三保子氏、tribe主宰者の榊龍昭氏には資料に関するご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

文化学園服飾博物館編『西アジア・中央アジアの民族服飾』文化出版局、2006年  
 ウィルフレッド・セシジャー著、白須英子訳『湿原のアラブ人』白水社 2009年  
 Ochsenschlager, Edward L. *Iraq's Marsh Arabs in the Garden of Eden*. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, 2004

These two floor coverings have a colorful and original design. They were made by the people called the Marsh Arabs, who lived in the marshland of southern Iraq, known as the cradle

of the Mesopotamian Civilization. Once, the vast marshlands spread from the junction between the Tigris and Euphrates rivers. In that area, there were many tall reeds and many kinds of aquatic animals. The Marsh Arabs had a traditional way of life, for example building houses made of reed, keeping water buffalo and hunting fish.

In the picture, you can see two cloths joined together. The dark red base textile is made of wool. The surface design is created by overall chain stitch. The embroidery thread is also made of wool. The design of one cloth is divided into three parts. On the left and right sides, there are geometric patterns, and in the central part, various shapes of animals such as camels, birds, and flowers are hidden in the geometric patterns. Such motifs apparently seemed to show the marsh, animals, and plants which the Marsh Arabs could see in the landscape. It is said that these were not only used as floor coverings but also as blankets, mural decorations, and bride's outfits.

Since the 1970's, almost all the marshlands have been destroyed by dam construction, damage from wars, and climate change. It was difficult for the Marsh Arabs to live there, and they were forced to seek refuge in the cities. Since the end of the Iraq War in 2003, the marshlands have been gradually recovering. In 2016, the marshlands were registered as a UNESCO World Heritage Site. However, their original environment has still been lost.

This floor covering shows one aspect of the traditional culture of the Marsh Arabs.



細いステッチが施されたラクダ



イラク 20世紀  
 縦 244 cm × 横 168 cm  
 当館蔵 (江上波夫コレクション)

Iraq 20th century CE  
 L. 244 cm × W. 168 cm  
 Owned by the YMEAC, Egami Namio Collection

# 牙製婦人像の「再発見」

Rediscovery of Ivory Female Figurine

高橋 健 TAKAHASHI Ken

この資料は1950年にA.サルモニーによって紹介されたマッコウクジラ牙製の彫像で、オホーツク文化の牙製婦人像との類似から注目されてきた資料である。筆者はかねてこの資料を探索していたが、最近になって米国フィラデルフィア州の名門女子大学・プリンマー大学（Bryn Mawr College）博物館のオンラインデータベース上にこの資料があるのを発見した。

当該資料は、東洋美術のコレクターであったブル夫妻（Richard C. Bull & Josephine Rothermell Bull）によって1986年に寄贈されたものである。資料カードによれば、高さ9.3cm、基部の幅3.5cmであり、サルモニー報告の3/8インチというサイズと一致する。ほぼ完形だが、表面は一部剥落している。色調は全体に飴色で、胸部前面は赤味を帯びている。全体に右斜め前に傾いたポーズであるが、これは素材のマッコウクジラ牙の形状を反映しているのだろう。

頭は菱形の頭巾をかぶったような形で、顔は目・鼻・口が表現されている。やや吊り気味でアーモンド形の目は沈線で描かれ、鼻は棒状に隆起している。口はやや深く刻まれている。両手は腰の前で合わせていて、その部分に円形の窪みがあり、容器を持っているように見える。胸のふくらみはわずかである。後頭部や胸部背面側は無文であり、オホーツク文化の牙製婦人像にしばしばみられる髪型や衣類を表したと思われる表現はない。

ユーラシアに分布する石人像には容器をもつ例があることが知られており、「モンゴリア出土」といわれたこの資料は、牙製婦人像の起源論との関連で注目されてきた。それに対して、筆者はこの資料が「オホーツク文化の牙製婦人像そのもの」ではないかと考えているが、両手で容器をもつ例

はほかに存在しないのも事実である。詳細は資料を実見してからの検討に委ねたいが、オホーツク文化の牙製婦人像の研究において重要な意味をもつ「再発見」である。（YMEAC 主任学芸員）



This specimen is a figurine made of sperm whale tooth, which was introduced by A. Salmony in 1950. This figurine has attracted the attention of Japanese archaeologists because of its resemblance to the ivory figurines of the Okhotsk Culture. The author, who has been looking for this figurine for years, finally found this specimen on the online database of Bryn Mawr College in Pennsylvania, USA.

The specimen was donated by Richard C. Bull and Josephine Rothermell Bull, renowned collectors of Chinese art, in 1986. According to the material card, the figurine measures 9.3cm in height, which corresponds to the size reported by Salmony, 3 5/8 inches. The piece is almost complete, but the surface is partially peeled off. While the overall color is amber, the front side of torso is reddish. The body is leaning forward to the right, probably reflecting the shape of the raw material, a sperm whale tooth.

The rhomboid-shaped head looks as if it is wearing a hood. The eyes, the nose and the mouth are expressed on the face; the almond-shaped eyes

are incised, the nose is raised, and the mouth is deeply incised. The hands are put together in front of the waist, the circular dent there making it seem as if it is holding a bowl. The bulge of the chest is slight. The back sides of the head and the body are plain, lacking any expression of hairstyle or clothing, which are often seen in the ivory figurines of the Okhotsk Culture.

Since some of the stone sculptures of Eurasia (*Kamennaya Baba*) are holding bowls, this small figurine, estimated to be from Mongolia, has attracted the attention of Japanese archaeologists because of its possible relation to the origin of the ivory figurines of the Okhotsk Culture. The author, on the other hand, considers that this specimen belongs to the Okhotsk Culture itself, but it is true that there are no other figurines holding a bowl in this culture. The author would like to further examine and study this figurine after actually seeing the material, but there is no doubt that this “rediscovery” may have a great significance on the study of the ivory figurines of the Okhotsk Culture.



## 参考文献

Salmony, A. 1950 Notes on a “Kamennaya Baba”. *Artibus Asiae*. 13:4-16  
 Bull, R. C. 1965 The metamorphosis of one collector. *Expedition*. 7(3):39-47  
 高橋 健 2021 「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9:14-38  
 TriArte: Art & Artifacts Database <https://triarte.brynmawr.edu/objects-1/info/156465>  
 画像提供：Bryn Mawr College

幕末開港に由来する国際都市横浜は、さまざまな国籍や民族の人びとによって築かれてきた街です。横浜をふるさと、あるいは第二のふるさとと思う「浜っ子」たちのルーツは多様です。この新企画では、多文化共生都市横浜を支える主役の方々を紹介していきます。

伊藤泉美 Ito Izumi

## 周慶錦

### 老舗広東料理店を継いで

(有)同發 代表取締役、廣東會館倶楽部会長

SHU Keikin, President of Douhatsu Co. Ltd., Chairman of the Canton Kaikan Club in Yokohama



写真1  
同發本館の前で  
2022年3月 撮影：横山和江  
Mr. Shu, at the front of the  
Douhatsu.  
Photo by Yokoyama Kazue  
ショーウィンドに見える焼き物は  
同發の名物。

横浜生まれ横浜育ち。一族のルーツは中国広東省。親族が初めて横浜にやってきたのは明治時代。以来、周家は横浜の街とともに、関東大震災も太平洋戦争も乗り越えてきた。現在、同發は横浜中華街の老舗広東料理店として知られているが、当初は中華雑貨や食材を扱う店で、戦後に本格的な中華料理店となった。

周慶錦さんは1965年、父周富祺（しゅうふうぎ）と神戸出身の母周寛美（しゅうひろみ）との間に生まれた。一人息子であり、16歳の時に父が急死したこともあり、早くから老舗を継ぐという重圧が肩にのしかかっていた。小中高は山手のセント・ジョセ

フ・インターナショナル・スクールで学んだ。同校には中国系、インド系、欧米系などの外国ルーツと日本人の生徒が半々で、12年も一緒に過ごしたから同窓の繋がりは強い。

高校卒業後はサンフランシスコ大学に留学した。横浜を出てみたかったし、サンフランシスコは住んでみたい街だったから。そこには周家の親戚も暮らしていた。帰国後は同發に入り、2005年に母が亡くなり店を継ぐ。従業員を大切に社風なので古参が多く、気苦労もしたし、香港出身のコックとは言葉の面で苦労もした。両親の世代は広東語が話せたが、自身の母語は日本語であるからだ。



写真2  
明治・大正期の同發  
横浜開港資料館所蔵  
Douhatsu in the Chinatown from  
the 1900's to the 1920's  
中華街大通りを写した1900年代から  
1920年代の写真。赤丸の箇所に「同發  
號」の看板が掛かっている。場所は現在  
の本館所在地と同じ。

2000年に名古屋市出身の美智子さんと結婚し、長女と長男に恵まれた。二人の子どもたちは、ともにインターナショナル・スクールに通わせた。それは「様々な文化背景を持った人が暮らし、それが当たり前だという考えを持って、世界を見てほしい」からだ。インターナショナル・スクールだと、かえってステレオ・タイプでとらえる傾向も否めないが、「ステレオ・タイプにも意味があると思う。それはそれぞれの長い歴史と文化の中で培われたものだから。」

横浜は、周さんにとって生まれ故郷。この街がこの街らしさを保っていく上で、教育が大切だと思っている。特に中華系の学校やインターナショナル・スクールがあるから、それぞれの民族の文化や伝統を失わずに暮らしていける。また横浜らしさという観点からは、いろいろなルーツの人びとが築いてきた文化や歴史を大切に、洋館など古い建物ももつと大切にしてほしいと思う。

同發を経営する上では、基本を残しつつ新しいことにもチャレンジしている。伝統があるから、古いから、残すのではなく、良いものだから、残していく。それが伝統につながる。今はコロナで大変だけれど、「同發」の店名に込められたモットー「店、お客さま、従業員」が「共に発展する」を胸に、日々励んでいる。（YMEAC 副館長）

Yokohama is an international city that has been constructed by various ethnic people since its port was opened to the world in the mid-19th century. In this column, we introduce attractive people living in Yokohama who have roots in various regions as the symbol of the diversity of this city.

Douhatsu is a famous Cantonese restaurant in Yokohama Chinatown. The Shu family, whose original Chinese name is Zhou, has its root in the Canton of China. They have over a hundred years of history in Yokohama. Mr. Shu Keikin was born in Yokohama, 1965 as a son of Shu Fuki and Shu Hiromi, a Kobe born Chinese. Mr. Shu learned at the Saint Joseph International School in Yokohama and enjoyed his school life with his Chinese, Indian, Japanese, American, and European friends. He thinks international or ethnic education is especially important for the international city of Yokohama to maintain its cultural diversity.

As for the business, Mr. Shu thinks that tradition and challenge are both important. While the restaurant management is very severe these days under the influence of the Covid-19, he challenges new business models with the motto of "Our restaurant, customers and employee, develop together" which is put for the name of the restaurant, Douhatsu.

# The YMEAC Collection: [October 2021 to March 2022] Recent Additions

## 蔵品紹介 —新収蔵資料—

2021年10月から2022年3月までにご寄贈頂きました資料をご紹介します。ご寄贈いただきましたみなさま、ご寄贈いただくに当たりご協力を賜りましたみなさまに厚く御礼申し上げます。なお、出版物につきましては、点数が多いため本誌ではご紹介しておりません。整理が終り次第、熟覧に供する出版物はインターネットの目録に掲載し、学習教材として受贈いたしました出版物は、2階展示室内ライブラリーでご利用いただいております。どうぞご活用ください。

※ライブラリーの図書は入れ替えがありますのでご了承ください。

(敬称略)

収蔵番号 YMEAC-21-0052~0152

### 福昌中国服装店関係資料

点数 101点

地域 日本ほか

寄贈者 村上英徳氏

道具類  
日本  
1980年代頃から2000年代  
Various tools for making Qipao  
Japan 1980s to 2000s  
Donated by Murakami Hidenori



旗袍用生地類  
日本、中国  
1980年代頃から2000年代  
Cloth for Qipao  
Japan, China 1980s to 2000s  
Donated by Murakami Hidenori

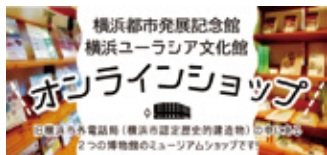
Online Shop



### オンラインショップ始めました!

<https://tohatsu-eurasia.shop-pro.jp/>

横浜ユーラシア文化館と横浜都市発展記念館のオンラインショップのサイトです。両館の展示図録などの出版物やオリジナルグッズの一部を扱っています。どうぞご利用ください。



Museum Shop



### ミュージアムショップも営業中!

開店時間：午前9時半～午後5時

オンラインショップでは販売していないカットガラス碗や絵葉書、地図などもありますので、ご来館の際にはぜひお立ち寄りください。



## 催し物案内

## Exhibitions & Events

### イベント

### 横浜ユーラシア・スタチュー・ミュージアム in ハマフェス

2022年5月28日(土)、29日(日)

Saturday 28 and Sunday 29 May 2022

\*雨天の場合は規模を縮小して実施

5月最後の週末に、横浜開港163年にちなんで地域を盛り上げる「ハマフェスY163」が山下公園など5カ所のエリアを中心に開催されます。その参加プログラムとして「横浜ユーラシア・スタチュー・ミュージアム in ハマフェス」を山下公園通りで行います。異国情緒あふれる横浜の街並みを背景に様々なスタチュー(人間彫刻)を楽しめるイベントです。詳細は決まり次第、当館ホームページに掲載します。



赤い靴の女の子  
2021年撮影

協力

スタチューパフォーマンス協会・山下公園通り会  
ハマフェスY163 <http://www.y151-200.com/>

### お知らせ

#### 2022年特別展「山本博士コレクション展 YOKOHAMA・東西文化のランデブー(仮称)」延期のお知らせ

『News from EurAsia』第36号でご案内しておりました特別展「山本博士コレクション展 YOKOHAMA・東西文化のランデブー(仮称)」[会期:2022年4月9日(土)~7月3日(日)]は、展示室空調設備の故障等により延期することになりました。楽しみにされていた皆さまには誠に申し訳ございません。

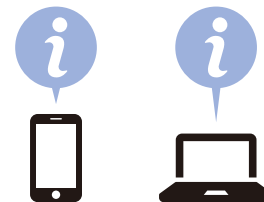
開催時期が決定しましたら、この広報誌、当館ホームページ等でご案内いたします。

### ご来館者のみなさまへ

新型コロナウイルス感染症予防のため、展示会期、開館日、開館時間等を変更する場合があります。最新の情報はホームページ、お電話等でご確認ください。

#### 観覧券がオンラインで購入できます!

展示観覧券を事前に購入される方は、当館ホームページよりオンラインチケットサービスをご利用ください。混雑時は事前購入された方が優先入場となります。



横浜ユーラシア文化館  
オンラインチケットサービス